

世界史を構造で読むⅢ

国家の再編と海洋世界

はじめに

本分冊では、中世に並存していた複数の文明圏が、どのように再び大きく結びつき直していったのかを扱います。

第二分冊では、土地に根ざした分権的秩序、宗教や思想による広域的統合、交易ネットワークによる交流を通して、中世世界が複数の文明圏として成り立っていたことを見ました。

それに対し本分冊では、国家権力の再集権、軍事と財政の結合、海洋進出、商業資本の拡大、銀の世界流通を通して、近世世界がどのように形づくられていったのかを考えます。

ここで重要なのは、単に「大航海時代が始まった」「植民地が増えた」と覚えることではありません。国家、軍事、商業、海洋、貨幣といった要素がどのように結びつき、世界の重心を組み替えていったのかを捉えることです。

本分冊は、文明圏の並存から、世界の再接続へと至る過程を、構造的に理解するための材料となることを目指しています。

○本分冊の見取り図

本分冊では、次のような流れで近世世界の形成をたどる。

- 分権世界から再集権国家へ
- 軍事と財政の結合
- 海洋世界の拡大
- 商業資本と植民地帝国
- 銀の流通と世界市場の萌芽

すなわち、

分権 → 再集権 → 海洋進出 → 商業帝国 → 世界市場の萌芽

という流れです。

○本分冊の使い方

本分冊でも、学び方の基本は変わりません。

1. 各設問に対し、自分の言葉で答案を書く。
2. 模範解答と別解例を読み、構造の捉え方を確認する。
3. 教科書ナビを手がかりに、具体的な出来事や固有名詞を補う。
4. 章末の派生問いを通じて、理解を広げる。

ここでの目標は、固有名詞を並べることではなく、なぜそのような変化が起きたのかを説明できるようになることです。

■ 第10章 国家の再集権と主権の形成

🎯 中心問い

中世の分権世界から、なぜ再び強い国家が現れたのか。

◆ 問1

再集権とは何か説明せよ。

【地方領主や都市 権限 中央】

模範解答

再集権とは、中世の分権秩序の下で地方領主や都市が持っていた軍事・財政・司法の権限を、王権が中央へ集め直していく動きである。徴税制度の整備がその基盤となった。

別解例①

再集権とは、封建的分権体制のもとで分散していた支配権を王権が回収し、軍事・財政・司法を中央政府の下に再編していく過程である。国家形成を進める主要な動きであった。

別解例②

地方領主や自治都市が担っていた統治機能を、王権が制度的に吸収して中央支配を強めていく動きを再集権という。常備軍と官僚制、徴税制度の整備がその土台となった。

◆ 問2

西ヨーロッパで王権が強化された要因を説明せよ。

【諸侯 常備軍 市場】

模範解答

フランスやイングランドでは、封建諸侯の力が戦争や内乱を通じて弱まり、王が常備軍や官僚を整備して地方支配を強めた。さらに都市や商人層も統一的秩序を求め、王権強化を後押しした。

別解例①

西欧では戦争と内乱の過程で有力諸侯が衰え、王権は徴税権と司法権を拡大した。都市の成長や商業発展も、地域ごとに分かれた秩序より統一国家を支持する方向に働いた。

別解例②

封建領主の自立性が揺らぐ中、王は軍事力と官僚制を整え、地方を直接統治しようとした。都市民や商人も安定した市場を求め、王権の再集権化を支える基盤となった。

◆ 問3

常備軍と徴税制度は、どのように再集権を支えたか説明せよ。

【戦争のコスト増加 財源 独占】

模範解答

火器の普及と戦争の大規模化は、継続的に兵を維持する常備軍と、その費用を賄う徴税制度を必要とした。王権は財政機構を整備して軍事を独占し、地方勢力を抑えて中央集権化を進めた。

別解例①

火器の使用拡大により戦争は高コスト化し、臨時の封建軍では対応しにくくなった。そこで王権は常備軍を整え、税収を安定的に確保する財政機構を作り、中央支配を強めた。

別解例②

軍事革命は、武器調達と兵士維持のため恒常的財源を要求した。王権は徴税制度と官僚制を整え、軍事力を自ら掌握することで諸侯を従わせ、再集権化を実現した。

◆ 問 4

西欧の主権国家形成と、オスマン帝国・明の統治構造の違いを説明せよ。

【封建 分権 中央集権】

模範解答

西欧では封建分権の克服を通じて主権国家が形成され、王権が領域内の統治を独占していった。一方、オスマン帝国や明では早くから強い中央権力が存在し、再集権より既存の帝国統治を維持・再編する性格が強かった。

別解例①

西欧の国家形成は分権的封建制を乗り越えて主権を確立する過程であった。他方、オスマン帝国や明はもともと中央集権的要素が強く、王権強化は帝国秩序の維持や再調整として現れた。

別解例②

西欧では地方諸侯から権限を奪い返して国家が形成されたが、オスマン帝国や明では既に強い官僚制や軍事支配が存在した。したがって、再集権の意味と出発点が異なっていた。

◆ 問5

中世の分権世界から近世の再集権国家が生まれた理由を論ぜよ。

【戦争の大規模化 商業発展 官僚制 常備軍】

模範解答

中世の分権世界から近世の再集権国家が生まれたのは、戦争の大規模化と商業発展が、統一的な徴税・司法・軍事制度を必要としたためである。王権は官僚制と常備軍を整え、地方諸侯の自立性を抑えた。さらに市場統合を求める都市や商人層もこれを支え、国家は領域内で主権を独占する方向へ進んだ。

別解例①

近世国家の再集権化は、単に王が強くなった結果ではなく、軍事費の増大と商業社会の拡大に支えられて進んだ。王権は安定した税収と常備軍を必要とし、官僚制を通じて地方を統制した。統一市場と法秩序を求める都市・商人層も王権を支持し、分権秩序は主権国家へと再編された。

別解例②

分権的封建制から再集権国家への転換は、軍事革命と経済変化が統治の再編を促した結果であった。火器と常備軍には恒常的財源が必要で、王権は徴税制度と官僚制を整えた。さらに商業発展は統一的法秩序を求め、地方分権を越える主権国家の形成を後押しした。

一文要約

再集権国家は、軍事・財政・市場の再編によって生まれた。

派生問い

- 強い国家は、商業発展があっただけで成立するのか。
- 火器の普及がなければ再集権は進んだらうか。
- 主権国家は帝国とどこが異なるのか。

教科書ナビ

- **西欧**：「百年戦争」「バラ戦争」「フランス王権の強化」「イングランド王権」の節を確認し、王権が諸侯を抑えていく流れを整理する。
- **軍事と財政**：「火器の普及」「常備軍」「徴税制度」の記述を見て、戦争の変化が国家の形をどう変えたかを確認する。
- **比較**：「オスマン帝国」「明」の統治制度の箇所を読み、西欧の“再集権”と、帝国秩序の“維持・再編”との差を考える。
- **視点**：読むときは「誰が軍事を握ったか」「誰が税を集めたか」「誰が法を定めたか」の三点を意識するとよい。

■ 第11章 火器・軍事革命・国家財政

🎯 中心問い

火器と常備軍は、国家の形をどのように変えたのか。

◆ 問1

軍事革命とは何か説明せよ。

【火器 常備軍 財政 統治】

模範解答

軍事革命とは、火器の普及や常備軍の整備、築城技術の変化などによって戦争の規模と性質が大きく変化し、それに対応する国家の財政や統治制度も再編された現象を指す。

別解例①

火薬兵器の拡大、歩兵中心の戦術、常備軍の発達などにより、戦争が高コスト化し、国家の徴税・行政機構まで変化した歴史的転換を軍事革命という。

別解例②

軍事革命とは、火器の導入によって戦争の方法が変わり、それに伴い軍隊の維持、財源確保、統治制度の整備が進んだ一連の変化をいう。

◆ 問2

火器の普及は戦争と統治にどのような変化をもたらしたか。

【騎士 歩兵 国家】

模範解答

火器の普及は、騎士中心の戦いを相対化し、訓練された歩兵と大量の装備を必要とする戦争へ移行させた。その結果、個々の領主よりも国家が軍事を統制しやすくなり、再集権が進んだ。

別解例①

火器は従来 of 騎士の軍事的優位を弱め、兵器調達と訓練を一元的に管理する必要を高めた。これにより、王権が軍事を独占しやすくなり、中央集権化が進んだ。

別解例②

火器の導入により戦争は装備と訓練に多くの費用を要するようになった。封建領主の私兵では対応しにくくなり、国家が軍事力を直接管理する方向が強まった。

◆ 問3

常備軍の成立は徴税制度とどのように結びついたか説明せよ。

【維持 税収】

模範解答

常備軍は戦時だけでなく平時にも兵士を維持する必要があるため、恒常的財源が求められた。そのため国家は徴税制度と官僚機構を整備し、安定した税収を基盤に軍事力を保持するようになった。

別解例①

臨時の封建軍と異なり、常備軍は継続的に兵士へ給与や装備を供給しなければならない。国家はその費用を賄うため税を常設化し、徴税を担当する行政機構を発展させた。

別解例②

常備軍の維持には平時からの資金調達が必要であり、これが国家に恒常的徴税を求めた。結果として財政と行政が整備され、軍事と国家財政が密接に結びついた。

◆ 問 4

西欧の軍事財政国家と、オスマン帝国・明の軍事統治の違いを説明せよ。

【徴税 国債 既存の機構】

模範解答

西欧では火器と戦争の高コスト化が、徴税と国債を基盤とする軍事財政国家を形成した。一方、オスマン帝国や明では既存の帝国統治機構の中で軍事を維持する傾向が強く、財政運営の仕組みに差があった。

別解例①

西欧では戦争費用の増大に対応して税制や信用制度が発達し、軍事財政国家が形成された。他方、オスマン帝国や明は官僚制や既存の帝国機構を通じて軍事を維持する性格が強かった。

別解例②

軍事革命に対し、西欧は徴税と借入を組み合わせることで国家財政を強化した。対してオスマン帝国や明では、既存の中央集権的支配の中で軍事力を支える傾向が目立ち、発展の仕方が異なった。

◆ 問5

火器・常備軍・徴税制度の結びつきが、近世国家の形成に与えた影響を論ぜよ。

【恒常的財源 軍事力独占 支配】

模範解答

火器の普及により戦争は高コスト化し、常備軍の維持には恒常的財源が必要となった。これに対応して国家は徴税制度と官僚機構を整え、軍事力を中央で独占する方向へ進んだ。こうして軍事と財政が結びついた国家は、地方勢力を抑えつつ領域支配を強化し、近世国家形成の基盤となった。

別解例①

軍事革命は戦争を大規模かつ費用のかかるものへ変えたため、国家は常備軍を支える安定財源を必要とした。徴税制度や行政機構が整備され、王権は軍事を直接管理するようになった。その結果、地方分権を超える再集権的国家が成立していった。

別解例②

火器と常備軍の発展は、軍事を封建領主の私的力ではなく国家財政の問題へ変えた。王権は税収と官僚制を整え、軍事力を一元的に掌握した。これにより国家は領域内の支配を強化し、近世的な統治体制を築いていった。

一文要約

火器と常備軍は、軍事を国家財政の問題へ変えた。

派生問い

- 火器がなければ、近世国家の再集権は同じ形で進んだらうか。
- 軍事費の増大は、なぜ国家に徴税制度の整備を迫るのか。
- 現代国家においても、軍事と財政は同じように結びついているか。

教科書ナビ

- **火器と戦争**：「火薬兵器の普及」「騎士の衰退」「歩兵戦術」の節を見て、戦争の担い手がどう変わったかを確認する。
- **常備軍と徴税**：「王権強化」「常備軍」「徴税制度」の記述を見て、軍事費と国家財政の関係を整理する。
- **比較**：「オスマン帝国」「明」の軍事制度を参照し、西欧の軍事財政国家との違いを考える。

■ 第12章 海洋世界の拡大と交易路の転換

🎯 中心問い

なぜ世界の重心は、陸と内海から大洋へ移ったのか。

◆ 問1

海洋世界の拡大とは何か説明せよ。

【海路 交易 秩序】

模範解答

海洋世界の拡大とは、国家や商人が外洋航海を通じて遠隔地を結び、従来の内陸路や地域交易圏を越える広域的な交通・交易・支配の仕組みを形成していく動きである。海が世界再編の主要舞台となったことを指す。

別解例①

大洋航海の発展によって、これまで分かれていた地域が海路で直接結びつき、交易・征服・移住が地球規模で進んでいく現象をいう。海上交通が世界秩序の中心となっていく過程である。

別解例②

海洋世界の拡大とは、外洋航海と海上交易の発展により、国家と商人が遠隔地へ進出し、経済圏と支配圏を広げていく動きである。海が文明圏どうしを再接続する軸となった。

◆ 問2

ポルトガルやスペインが海洋進出を進めた要因を説明せよ。

【王権 香辛料 羅針盤】

模範解答

再集権化した王権が航海を支援できる財政力を持ち、香辛料や金銀への需要が外洋航路開拓を促したことが大きい。さらに羅針盤や外洋帆船などの航海技術の進歩が、遠距離航海を現実のものとした。

別解例①

王権強化により国家が航海事業を支援できるようになり、商業利益と宗教的拡張の意図が海洋進出を促した。加えて羅針盤や地図、帆船技術の発展が外洋航海を可能にした。

別解例②

ポルトガルとスペインでは、王権の再集権と商業的利益追求が結びつき、海路開拓が国家的事業となった。さらに航海術と船舶技術の向上が、長距離の大洋航海を支える条件となった。

◆ 問3

ヨーロッパの海洋進出は、既存のインド洋交易圏にどのような変化を与えたか。

【開かれたネットワーク 軍事 支配】

模範解答

インド洋交易圏はもともとアラブ商人やインド商人などが担う比較的分散的な海上ネットワークであったが、ヨーロッパ勢力は武力と要塞化を用いて航路支配を図った。その結果、交易は国家的軍事力と結びつく性格を強めた。

別解例①

既存のインド洋交易は多様な商人集団による比較的開かれたネットワークであった。そこへヨーロッパ勢力が参入し、海軍力や拠点支配を通じて交易を軍事的・国家的に統制しようとしたため、秩序の性格が変化した。

別解例②

ヨーロッパの海洋進出は、従来の商人主導の交易圏に国家権力と武力支配を持ち込んだ。これにより交易路は単なる商業空間ではなく、海軍力と植民地拠点を伴う競争の場へと変質した。

◆ 問 4

大西洋世界の成立は、世界の構造をどのように変えたか。

【経済圏 分業 不均衡】

模範解答

新大陸との接続により、銀・砂糖・奴隷労働・植民地支配が結びついた大西洋世界が形成された。これにより地中海や内陸交易に代わって大西洋が経済の中心性を強め、世界規模の分業と不均衡な支配関係が進展した。

別解例①

大西洋航路の開拓は、ヨーロッパ・アフリカ・新大陸を結ぶ新たな経済圏を生み出した。銀や農産物、奴隷貿易が結合し、従来の交易路とは異なる地球規模の連関が強まった。

別解例②

大西洋世界の成立によって、海洋交易の中心は地中海から大西洋へ移った。植民地支配と奴隷貿易、資源流入が結びつき、世界の経済構造そのものが再編される契機となった。

◆ 問5

海洋世界の拡大が、近世世界の形成に与えた影響を論ぜよ。

【海路による接続 植民地支配 商業】

模範解答

海洋世界の拡大は、文明圏ごとに並存していた中世世界を海路によって再接続し、交易・征服・資源移動を地球規模で進めた。再集権国家は海軍と植民地支配を通じて商業利益を追求し、既存の交易圏にも軍事的介入を強めた。その結果、海は単なる交通路ではなく、国家・資本・帝国が結びつく近世世界の中核となった。

別解例①

大洋航海の発展は、分かれていた文明圏を直接結びつけ、交易路と支配圏を再編した。国家は財政と軍事を背景に海洋進出を進め、商業利益を植民地支配と結合させた。こうして世界はより密接につながる一方、不均衡な支配構造を含む近世的秩序へ移行した。

別解例②

海洋世界の拡大により、交易の重心は陸路や地域海域から外洋へ移った。国家は航海・海軍・植民地拠点を利用して広域経済を掌握しようとし、海は国家再編と商業資本拡大の場となった。これが近世世界の形成を支える重要な条件となった。

一文要約

海洋進出は、文明圏を再接続し、世界の重心を海へ移した。

派生問い

- 海洋進出は、単なる交易拡大なのか、それとも支配構造の転換なのか。
- インド洋交易と大西洋世界では、国家の関わり方がどう異なるか。
- 海が主舞台になることで、国家の性格はどう変わったのか。

教科書ナビ

- **大航海時代**：「ポルトガル・スペインの進出」「航海技術の進歩」の節を見て、なぜこの時代に外洋航海が可能になったかを確認する。
- **インド洋世界**：「インド洋交易」「イスラーム商業圏」の記述を読み、既存の交易ネットワークがどのような性格を持っていたかを整理する。
- **大西洋世界**：「コロンブス以後の新大陸」「銀の流通」「奴隷貿易」の項目を確認し、新しい海洋世界がどのような経済構造を生んだかを見る。

■ 第13章 商業資本と植民地帝国

🌀 中心問い

商業の拡大は、なぜ帝国と結びついたのでか。

◆ 問1

商業資本とは何か説明せよ。

【流通 利潤 広域】

模範解答

商業資本とは、商品流通や遠隔地交易を通じて利潤を得るために用いられる資本である。生産そのものよりも、売買・輸送・金融を通じて価値を増やし、広域市場の拡大と結びついて発展した。

別解例①

商業資本とは、商品の売買や輸送、金融活動を通じて利潤を得る資本である。工場生産よりも流通と交易の拡大を重視し、遠隔地を結ぶ商業網の発達とともに力を強めた。

別解例②

商品を安く仕入れて高く売る過程や、輸送・金融を通じて利益を生む資本を商業資本という。広い交易圏を前提とし、国家支援や海上交通の発展と結びついて成長した。

◆ 問2

近世国家と商業資本は、なぜ結びついたのか説明せよ。

【財政基盤 軍事的保護 特権】

模範解答

近世国家は財政基盤の拡大を求め、商業資本は交易独占と軍事的保護を必要とした。このため両者は結びつき、国家は港湾・海軍・特許会社を整え、商人は税収や海外進出を通じて国家を支えた。

別解例①

国家は戦争と統治のため新たな財源を必要とし、商人は航路確保や市場独占を求めた。そこで王権は商人に特権を与え、商業利益を税収化することで相互依存関係を強めた。

別解例②

商業資本は安全な航路と独占権を求め、国家はその利益から税や資金を得ようとした。こうして海軍力と商人資本が結びつき、海外交易は国家的事業として推進された。

◆ 問3

植民地帝国は、どのように商業資本の拡大を支えたか説明せよ。

【資源 市場 奴隷貿易】

模範解答

植民地帝国は銀・砂糖・香辛料などを本国へ供給し、商業資本の利潤拡大を支えた。とくにプランテーションと奴隷貿易は、生産と流通を大西洋規模で結びつけ、富の偏在を伴う経済構造を生み出した。

別解例①

植民地は本国に資源と市場を提供し、商業資本はそれを通じて巨利を得た。さらにプランテーション農業と奴隷労働が結びつき、大西洋を横断する不均衡な分業体制が形成された。

別解例②

商業資本は植民地から銀や農産物を吸い上げ、遠隔地交易を拡大した。奴隷貿易とプランテーションはこの仕組みを支え、支配と利潤追求が不可分な帝国構造を作り出した。

◆ 問4

スペイン・ポルトガル型の帝国と、オランダ・イギリス型の帝国の違いを説明せよ。

【王権 征服 会社 商業】

模範解答

スペイン・ポルトガルは王権主導で征服地を直轄支配し、銀や香辛料の独占を重視した。これに対しオランダ・イギリスは会社組織を活用し、商業利益を基礎に港湾や航路の支配を広げた点で異なる。

別解例①

イベリア諸国は王権が征服と布教を前面に出し、植民地を直接支配した。一方、オランダやイギリスは東インド会社などを通じ、商業と金融を基礎に海上帝国を築いた。

別解例②

スペイン・ポルトガルは領土征服と直轄統治の色彩が強かったが、オランダ・イギリスは会社の特権を与えて交易拠点を押さえ、商業中心の帝国形成を進めた。

◆ 問5

商業資本と植民地帝国の結合が、近世世界に与えた影響を論ぜよ。

【遠隔地交易 国家権力 不均衡】

模範解答

近世世界では商業資本が遠隔地交易を拡大し、その利益を確保するため国家権力と結びついた。海軍や特許会社、植民地支配がその装置となり、銀・奴隷・農産物の移動が大西洋とアジアを結びつけた。商業は単なる流通ではなく、軍事・国家・支配を伴う帝国形成の原動力となり、世界経済の不均衡な統合を進めた。

別解例①

商業資本は広域交易から巨利を得たが、その維持には航路の安全と独占権が必要であった。そこで国家は海軍力や会社特権を用いて海外進出を支え、植民地や奴隷貿易を通じて富を集積した。こうして商業と政治支配は不可分となり、近世世界には帝国と市場が結びついた不均衡な秩序が成立した。

別解例②

交易拡大は商人だけで完結せず、国家権力による保護と武力支配を伴って進んだ。植民地帝国は資源・労働力・市場を組み込み、会社組織は商業利益を制度化した。その結果、世界の諸地域は対等ではない形で結びつけられ、近世的な世界経済と帝国秩序が同時に形成された。

一文要約

商業資本は、国家と結びつくことで帝国化した。

派生問い

- 商業はなぜ武力を必要としたのか。
- 国家がなくても広域交易は維持できただろうか。
- 会社組織による支配は、王権直轄支配と何が違うのか。

教科書ナビ

- **商業資本の基礎**：「重商主義」「東インド会社」「大西洋三角貿易」などの節を見て、商業利益と国家政策の結びつきを整理する。
- **植民地支配**：「スペイン・ポルトガルの植民地帝国」「オランダ・イギリスの進出」の記述を見比べ、直轄支配と会社支配の違いを押さえる。
- **大西洋世界**：「銀の流通」「プランテーション」「奴隷貿易」の項目を読み、資源・労働・市場がどのように連結されたかを確認する。

■ 第14章 銀・流通・世界市場の萌芽

🎯 中心問い

世界は、いつから一つの市場へ近づき始めたのか。

◆ 問1

銀の世界流通とは何か説明せよ。

【新大陸 ヨーロッパ 市場 相互依存】

模範解答

銀の世界流通とは、新大陸で産出された銀がヨーロッパを経てアジアへ流れ、異なる文明圏の経済を一つの交換連鎖に結びつける現象である。これにより大洋をまたぐ貨幣流通が進み、各地の商品市場は相互に影響し合うようになった。

別解例①

大量の銀がアメリカ大陸からヨーロッパへ運ばれ、さらに中国などアジア市場へ流入したことで、離れた地域どうしの経済が貨幣を通じて結びついた現象である。従来は別々に動いていた市場が、価格や需要の面で連動し始めた。

別解例②

銀の世界流通とは、銀の産地・輸送地・消費地が海洋交易によって一体化し、銀を媒介に諸地域の交易が連鎖した状態を指す。各地の経済は独立して存在するのではなく、相互依存を強めながら世界市場の芽を育てていった。

◆ 問2

新大陸銀はどのように中国経済と結びついたか説明せよ。

【スペイン 税制 銀納】

模範解答

新大陸銀はスペインを経てヨーロッパへ流入し、その多くが銀需要の高い中国へ向かった。明後期には一条鞭法などにより銀納が進み、中国経済は銀を強く必要とした。その結果、アメリカ・ヨーロッパ・東アジアは貨幣を通じて結びついた。

別解例①

アメリカ大陸で採掘された銀はヨーロッパを経て東アジアへ運ばれ、中国の銀需要を満たした。とくに税制の銀納化が進んだ中国では銀が不可欠となり、新大陸の鉱山と東アジアの市場が遠く隔たりながらも強く連結された。

別解例②

新大陸銀はスペインの海上支配を通じて世界へ流通し、中国では税制改革と商品経済の進展により銀需要が高まっていた。そのため銀はヨーロッパにとどまらずアジアへ流れ、太平洋と大西洋をまたぐ交易連鎖の中心的媒介となった。

◆ 問3

価格革命はヨーロッパ社会にどのような変化をもたらしたか説明せよ。

【貨幣供給 地代収入 商業】

模範解答

ヨーロッパでは銀流入の増加によって貨幣量が拡大し、物価が継続的に上昇する価格革命が生じた。これにより地代生活者は相対的に不利となり、商人や生産拡大に対応できる層が利益を得た。社会経済構造は大きく再編され、国家財政も新たな規模へ押し上げられた。

別解例①

大量の銀が流入すると貨幣供給が増え、ヨーロッパでは長期的な物価上昇が起こった。固定収入に依存する領主や賃金生活者は圧迫される一方、商業や生産活動に関わる層は利益を得た。この変動は旧来の封建的収入構造を揺さぶり、社会階層の再編を促した。

別解例②

銀の流入はヨーロッパ市場に貨幣をあふれさせ、価格革命を引き起こした。物価上昇は旧来の封建的収入構造を揺さぶり、商業資本や国家財政の拡大を後押しして、近世的経済への移行を促した。流通に関わる層の優位が強まり、社会の重心も変化した。

◆ 問 4

世界市場の萌芽とは何か説明せよ。

【銀や商品 相互に影響】

模範解答

世界市場の萌芽とは、諸地域の市場がなお独立性を保ちながらも、銀・香辛料・織物などの流通を通じて価格や需要が相互に影響し始める段階を指す。完全な一体市場ではないが、世界規模の経済連関が形成されつつある状態である。

別解例①

各地域の市場が一つの制度で統一されたわけではないが、銀や商品が大洋を越えて循環し、遠隔地の需要変動が他地域へ波及する状態を世界市場の萌芽という。統一国家がなくても、交換関係が世界規模へ広がり得たことを示す概念である。

別解例②

世界市場の萌芽とは、地域ごとの経済構造や政治権力が異なるまま、海上交易と銀流通によって広域的な交換関係が成立する段階である。市場統合は不完全だが、各地の価格や需要が遠隔地の動向に左右され始める点に特徴がある。

◆ 問 5

銀の世界流通が、近世世界の形成に与えた影響を論ぜよ。

【世界市場 財政 植民地支配 相互依存】

模範解答

銀の世界流通は、新大陸の鉱山、ヨーロッパの商業資本、アジアの巨大市場を一つの連鎖に結びつけ、世界市場の萌芽を生み出した。銀は単なる貨幣ではなく、国家財政・植民地支配・海洋交易をつなぐ媒介でもあった。これにより諸文明圏は相互依存を強め、近世世界は政治的には分立しつつも、経済的には一つの連関へ組み込まれ始めた。

別解例①

世界的な銀流通は、アメリカ大陸の採掘、ヨーロッパの輸送と金融、アジアの需要を結合させ、各地域を経済的に接続した。さらに植民地支配や奴隷労働、海上交易がこの連鎖を支えたため、世界市場の萌芽は支配と不均衡を伴って進んだ。近世世界では、離れた地域の経済変動が互いに影響し合う新しい世界構造が形成された。

別解例②

銀の流通は、従来は別個に存在したヨーロッパ、アメリカ、アジアの市場を貨幣を通じて結びつけた。その背後では国家の海洋進出、商業資本の拡大、植民地支配が作用しており、世界経済は次第に一体化へ向かった。まだ完全な統一市場ではないが、近世世界は銀を媒介に価格・需要・交易が連動する経済空間へ変わり始めた。

一文要約

銀の流通は、文明圏どうしを経済的に結びつけ、世界市場の芽を育てた。

派生問い

- 銀はなぜ世界的交換媒体になり得たのか。
- 世界市場の萌芽は、支配と搾取を伴わずに成立し得ただろうか。
- 現代の世界市場と近世の「萌芽」は、どこが連続し、どこが異なるか。

教科書ナビ

- **新大陸銀**：「ポトシ鉱山」「スペイン帝国」「マニラ貿易」などの節を確認し、銀がどの経路で世界を移動したかを押さえる。
- **中国との接続**：「明の税制」「一条鞭法」「商品経済」の記述を見て、なぜ中国が銀を必要としたのかを整理する。
- **価格革命**：「16世紀ヨーロッパの経済変化」「重商主義」の項目を読み、銀流入が社会構造や国家財政に与えた影響を確認する。

★第三分冊まとめ

本分冊で扱ったのは、近世世界がどのように形成されていったかという問題です。

中世世界では、文明圏ごとに異なる秩序が並存していました。しかし近世に入ると、国家権力の再集中、軍事と財政の結合、海洋進出、商業資本の拡大が進み、それまで分かれていた世界は再び強く結びつき始めます。

この分冊で見た流れをまとめれば、次のようになるでしょう。

① 国家の再集権

分権的秩序の中から、王権が軍事・財政・司法を中央へ集め直し、主権国家の原型が形成された。

② 軍事と財政の結合

火器と常備軍の発達は、戦争を国家財政の問題へ変え、徴税と官僚制の整備を促した。

③ 海洋世界の拡大

外洋航海の発達によって、文明圏どうしは海を通じて直接結ばれるようになった。

④ 商業資本と植民地帝国

商業利益は国家と結びつき、交易は軍事的保護と支配を伴う帝国形成へと進んだ。

⑤ 世界市場の萌芽

銀の流通を媒介として、ヨーロッパ・アメリカ・アジアの経済は相互依存を強め、世界市場の芽が生まれた。

🔄 本分冊の一文要約

近世世界は、国家・軍事・海洋・商業・貨幣の結合によって形成された。

○次分冊への問い

ここまでで、世界はすでに大きく接続され始めています。けれどこの接続は、なお不均衡で、限定的なものでした。

次の段階で問われるのは、たとえば以下のようなことでしょう。

- 市民革命は国家の正統性をどう変えたのか。
- 産業革命は生産様式をどう変えたのか。
- 国民国家はなぜ強力な統合原理となり得たのか。
- 帝国主義は世界の不均衡をどう再編したのか。

第四分冊では、こうした問いを通じて、**近代的統合の成立とその矛盾**を扱うことになります。

○学習者へのひとこと

本分冊では、近世世界を「大航海時代」や「植民地」の知識としてではなく、**世界が再び一つの連関へ近づき始める過程**として見てきました。

固有名詞や年号を覚えることも大切ですが、それ以上に、

- 何が国家を強くしたのか
- 何が海への進出を促したのか
- 商業と支配がなぜ結びついたのか
- 貨幣がどう世界をつないだのか

を自分の言葉で説明できるようになってほしいと思っています。そのことが、近代世界を理解するための土台となるはずです。